

幻覚の生成－ α

Generation of Hallucinations－ α

kmi_ne

私たちが音（楽）を聴くとき、それは（ちょうどレコーダーが音響自体を記録するように）音響自体のみで完結しているのではない。例えば、モーツァルトの音楽を構成する音響自体に小節線が内在しているわけではないにもかかわらず、私たちはそれを聴いたときにある一定のテンポを知覚し、そればかりか、それらの音を様々なグルーピングして、拍子や、楽節の相互関係、メロディーと非メロディとの区別を“聴き取って”しまう。あるいは、トリルを聴くとき、私たちは実際にそれを構成している個々の音の正確な音価を聴いているというよりも、むしろ「トリル」という抽象的なカテゴリーを付与し、それを聴取しているように思われる。また、日本語で「イヌが走る」と発話された音声を聞くと、それは単なる「いぬがはしる」ではなく「いぬ／が／はしる」のような分割が無意識的に付与され、さらに聴取者はそれに「意味」と呼ばれる何らかをも読み取るが、一方、未知の外国語ではそのようなことが起こらない。

「音楽理論の対象が存在するとすれば、それは受容（これは音楽的客体、主体、受容結果の3部分からなる）である」という仮定のもと、本作では、この受容の過程で必然的に起こってしまう“幻覚”的なもののあり方を洗い出すことを目的としている。ここでいう幻覚とは、上で述べたような、音楽的客体に対して主体が（必然であれ偶然であれ）行ってしまう、要素の抽出やグルーピング、カテゴリーや意味や価値の付与、構造の予測と反省……などといった、音響そのもの（さらに抽象化すれば、音楽的客体）に対して外在的なあらゆる知覚内容を指している。本作は、この問題を、近藤譲の「線の音楽」的問題の一般化として扱うアプローチを試みる。

作曲家は作品構造を概ねマクロ→ミクロの順に決定する。しかし、聴取者が聞く際に実際に現れる構造の順序はミクロ→マクロである。例えば、作曲家が、ハ長調というマクロ構造“の中”で Dm-G-C のコード進行を構成し、さらにそのマクロ構造“の中”でピアノの両手が弾くべき音を構成したとしても、実際に聴取者に現れるのは1音1音の時間的順序的な現われであって、仮にコードや調性のようなマクロ構造が知覚されるとすれば、それは最初の数音や数コードを聴き終えた時点であり、しかも聴取者の知覚するその「マクロ構造」とは、ここでいう幻覚に他ならない。そこで、これを一般化すれば、音楽の時間的な進行に従ってある幻覚が形成され変容するという構図が、ミクロ／マクロ構造に限らず、グルーピングや意味付与や予測などのような、幻覚一般に対しても成り立つのではないか、という仮説に至る。

本作では、初めに、数秒程度の音声サンプルから抜き出された、0.05 秒程度のきわめて短い断片を前触れなく再生する。このときこの断片は、元音声の一部として聴かれた場合には聴取者によって付与されてしまったであろう、その前後の区間に対して持つ関係（＝幻覚）を、この場合は失ってしまう。

次に、その区間を中心として、次第に再生区間を広げた音声を連続して再生する。これは、最終的に音声サンプルの全区間が再生されるまで繰り返される。この工程の中で、次第に前後が明らかにつれて、種々の関係を知覚する（＝幻覚）余地が生まれてくることで、鑑賞者は、自身の聴取の中に幻覚という過程が段階的に生成される様子を、目の当たりにすることになる。この一連の作業が、ランダムに収集された 10 種類程度の音声サンプルに対して行われる。

このような目的から、本作を鑑賞する上では、何らかの音声再生されるごとに、それに伴って自身のうちに現れる幻覚（例えば、どのような判断を下したか、どのように構造をグルーピングしたか、何かある感覚を抱いたか、など）を、可能な限り詳細に省みることが求められている。その過程を通して、鑑賞者であるあなたは、受容の理論としての音楽理論の形成に参加することになるのである。